【ポスター発表】

社会福祉士養成実習における体験の意義について

－学生の実習前後の進路希望の変化から－

○　東日本国際大学　　今橋　みづほ（6052）
矢野　明宏（武蔵野大学・4501）

キーワード：実習教育、進路、成功体験、

１．研 究 目 的

本研究では、実習経験で得た「学生一人ひとりの思い」をとおして、社会福祉士養成実習の意義を再確認していこうとするものである。教員の立場からすると、本学学生には将来、福祉分野で活躍してほしいという思いがあるが、実際には必ずしもそのような結果になっているわけではない。しかし、実習経験を通して、福祉分野に就職をすることを決めた学生がいることも見聞している。そこで、本学学生にとって、社会福祉士実習が進路選択にどのような影響を与えているのか、その実態について調査し、今後の教育に反映させていきたいと考えた。

２．研究の視点および方法

実習前と実習後の学生の気持ちの変化が把握できるよう、以下の方法で調査を行い、特に実習前と実習後で進路希望に変化がみられた学生の回答に焦点をあて、精査した。

調査対象：平成 22 年度「社会福祉援助技術現場実習」を履修した 24 名（回収率 95.8%）
調査期間：平成23年2月（社会福祉援助技術現場実習の最終授業時）
調査方法：自記式による質問紙調査
調査内容：（1）実習前の気持ち、（2）実習中の気持ち、（3）実習後の気持ち、（4）実習体験を通して認識した相談援助とは、（5）実習前の進路希望（6）実習後の進路希望　など　11設問で構成

３．倫理的配慮

今回は、平成 22 年度「社会福祉援助技術現場実習」を履修した学生 24 名に対するアンケート調査結果をまとめたものである。会員は、両名とも当時の授業担当者であり、履修した学生たちのプライバシー等に細心の注意を払いつつ、集計結果をまとめ、資料を作成した。

学生たちに対しては、アンケート実施時に、本研究と趣旨についての書面での説明を行い、24 名全員の同意を得た。その他、本学会の定めにより、研究遂行上適切に配慮した。

４．研 究 結 果

＜実習前後の福祉分野への進路希望の変化＞　（n＝23）

質問４／質問 10	実習後　希望する	実習後　希望しない	合計
実習前　希望する	10 名（43.4%）	2 名（8.7%）	13 名（56.5%）
実習前　希望しない	11 名（47.8%）	0 名（　0%）	10 名（43.4%）
合計	21 名（91.2%）	2 名（8.7%）	23 名（99.9%）

1）質問 4 と質問 10 の回答理由からの分析

①質問４　実習前希望しない⇒質問 10　実習後希望する　１１名

実習前、11 名（47.8%　n=23）の学生は、福祉分野に進路を希望していなかった。しかし、実習後、福祉分野の進路を具体的に考えていったようである。

その理由としては、「利用者とうまくコミュニケーションがとれた」「うれしかった」「やりがいを感じた」などの記述が多くみられ、実習中の成功体験が実習前の躊躇、不安を前向きなものに変化させていったようである。

②質問４　実習前希望する⇒質問 10　実習後希望しない　２名

2 名（8.7% n＝23）の学生は、実習前は福祉分野に進路を希望していたが、実習後、福祉分野への進路を希望しなくなった。

学生 A は、実習体験の中の現実につらさを感じ、その現実の中で自分が進んでいくこと不安が募り、期待がもてなくなってしまったようである。

学生 B は、実習体験の中につらさを覚えたが、同時にやりがいを実感した。また、福祉の領域の幅広さも感じてきたようである。そのため、福祉分野にとどまらず、他分野で自分の学びを活かしたいと強く感じたということである。

2）1）①と質問 7（うれしかったことについて）の比較分析

実習前、福祉分野に進路を希望していなかった学生のうち 7 名（63.7%　n=11）は、質問７で利用者から「ありがとう」などの感謝の言葉をいただいたという記載がみられた。これらのことから、学生が利用者と実際にかかわり、承認欲求を満たされることで、セルフエステームを増すことができ、福祉分野に進路選択することが自身の喜び、やりがいにつながると認識したのではないだろうかと考えた。

3）今後の実習教育における配慮すべき視点

学生は、実習に「現場を体験する」「自分の適性を見極める」というニーズを強く持っている。教員は法の定めによるシラバスを遵守することだけに意識を傾けがちになってしまうが、学生の上記のようなニーズがあることも忘れてはならない。それらの学生に、どのように寄り添い、向き合い、一緒に目標に向かって歩んでいけばよいかをより一層重視して、個別のニーズに配慮していくことも必要なのではないかと考えた。